

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	岩崎 雅之
論文題目	The Aesthetics of Personality beyond Traditionalism and Modernism: A Study of E. M. Forster
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、20世紀初頭のイギリスの小説家 E. M. フォースター(E. M. Forster, 1879-1970) の作風について、従来、伝統的写実小説のスタイルとモダニズム・スタイルの両方の特徴が見られるのは、単に丁度そういう時代の狭間にあったからだという外面的な理由づけで議論が終わっていたのに対し、そうした両面性が現れるのはフォースターの書こうとした内面的欲求の独自性からすれば必然であったのだと結論付ける大胆かつ斬新な研究成果である。岩崎氏はフォースターの一貫したテーマを人間のパーソナリティと社会／国家のあり方だと捉え、そのパーソナリティの成長や変化を描く際、作中人物が異性愛者、同性愛者、その両面を併せ持つ者など、様々であるため、主人公の成長と国家の発展とが同一視される古典的な教養小説の傾向とも、若者の成長即国家の発展という前提が崩壊し、成長しない若者を描くモダニズム期の教養小説とも異なる独自のスタイルを形成していったのだということを、作品ごとに加味されていく特徴を掬い取りながら説明していく。フォースターの作中人物は、人間形成の過程において、「象徴的瞬間」を経ることが特徴として挙げられるが、これを経た人物の「成長」は、時に(特に同性愛者の場合)社会的規範から見れば「退化」になることもあり、それを描くことは、伝統的な写実描写にモダニズム的象徴表現などを加えたり、逆にモダニズム的描写の中に古典的な作者の声が登場したりすることで可能になったのだと分析する。</p> <p>まず序論でフォースターの作品に関する批評の歴史を概観で紹介する。その際、フォースターの描くパーソナリティの成長と社会／国家との関係について、F. Moretti と J. Esty による伝統的写実小説およびモダニズムの <i>Buildungsroman</i> のあり方に関する考察を参照し、F. Jameson の論じる個人と国家／帝国の関係の問題を背景にフォースターの描くパーソナリティの独自性を浮き彫りにする。初期の作品の中でフォースターが描いたクリアな主体の自己形成に注目し、この様式から発展した <i>Howards End</i>, 1910 と <i>A Passage to India</i>, 1924 における自己と国家の共存もしくは離反という物語のあり方を論じていく。フォースターが描き続けていたのは、挫折や成長という古典的な教養小説の様式を超えた、パーソナリティという絶対的なものであり、このことを本論文では「パーソナリティの美学」と呼ぶことにし、以下本論では作品ごとにその変遷を分析していく。</p> <p>第1章 <i>Development and Decline of Personality</i> では、フォースターの啓示的瞬間がどのように現れているのかを初期の短編小説を通して考察する。フォースターが描く啓示的瞬間は、掲載誌である <i>Independent Review</i> が生み出す自由主義の言説と不可分のもので、個人主義を称揚するものであった。先行研究では書誌学的なアプローチがなされてこなかったが、この分析によって、後年の長編小説へと発展していったフォースターのナラティブの初期段階が明らかになった。また、短編小説の中で彼の「パーソナリティの美学」が、機械と戦争によって人間性を失っていく社会に対する批判としても現れていることが指摘される。さらに、テクノロジーとセクシャリティの問題にも踏み込んでいる。</p> <p>第2章 <i>Narratives of Hetero- and Homosexual Love</i> では、初期長編小説における象徴的瞬間が、いかに異性愛・同性愛の発展に関わっているかを論じている。<i>Where Angels Fear to Tread</i>, 1905 では、主人公フィリップがジーノとは同性愛的な、キャロラインとは異性愛的な関係を構築するが、彼の成長と挫折は従来型の教養小説とは異なるクリアな側面を持っており、フォースターの独自性が指摘できる。<i>The Longest Journey</i>, 1907 では、教養小説でありながら、そこから逸脱する主人公の成長のあり方に特徴がある。主人公リッキーは、パブリックスクールの教員でありながら、帝国主義者を養成する大英帝国の教育体制に反旗を翻す。また、妻のアグネスの制止を振り切り彼が異父弟のステューヴンとの愛を育む様は、帝国の認識からすれば退行的で不毛でさえあるものの、フォースターはそれを真の自己形成として描く。<i>A Room with a View</i>, 1908 では、ヴィクトリア朝的な因習から解放された真実の愛に目覚める異性愛のカップルが描かれるが、同時にそれは、「聖なる湖」での水浴場面に見られるような同性愛的な関係の発展もあってこそその達成と言える。しかし、戦後、フォースターは“A View without a Room”というこの物語のエピローグ</p>	

を書き、このカップルが幸せに結ばれる結末を否定している。戦前には可能であった若者とイギリス国家との理想的な同一化が戦後不可能になったことが明かされるのである。

第3章 Monologic and/or Polyphonic Narratives では、*Howards End* とモダニズムを代表する V. Woolf の *To the Lighthouse*, 1927 のナラティブの比較を行う。ウルフは道徳性と喜劇性、リアリズムと象徴主義的手法が混在するフォースターのナラティブを「ダブルヴィジョン」と呼んで批判したが、フォースターはそうすることで逆に登場人物と語り手の声の一つにまとまる「単声的」な語りの効果を生み出すことに成功しているのだと分析する。これを「多声的」なウルフのナラティブと対位的に比較することで、*Howards End* が教養小説の様式を独自の自己と国家の物語に発展させていることが明らかになる。*Maurice*, 1971 では、異性愛を「正常な」ものとする社会において、同性愛者の主人公がいかに苦悩し、成長していくかを描き、同性愛者の教養小説の可能性と限界をも示唆している。

第4章 Personal, Impersonal and Appropriated Voices では、帝国と自己という観点から *A Passage to India* において破滅的瞬間として描かれるマラバー洞窟の象徴的瞬間に注目する。啓示的瞬間がアデラの成長へと結びつかない点が独特であり、フォースターのナラティブの独自性が、同じく女性の成長と挫折を描いたウルフの *Mrs. Dalloway*, 1925 と比較することで一層鮮明になる。また、本章では、フォースターの小説作品が1980年以降のように映画化されたかも考察する。パーソナリティと国家とのあり方を追求したフォースター作品が、サッチャー政権下で揺らいでいたナショナル・アイデンティティ、「イングリッシュネス」を強化するために利用されたわけだが、その表象と原作小説を比較することで、フォースター小説のナラティブの独自性が浮き彫りになる。

「パーソナリティの美学」の変遷をたどり、本論文はフォースターが伝統的手法をモダニズムの方向に、モダニズム的手法を伝統的な方向に発展させた作家であると結論付けている。フォースターが最終的にたどり着いた境地は、言葉それ自体が未意味となり、個人の成長が望めなくなるような歴史的地点であった。マラバー洞窟のこだまが生み出す不条理は S. Beckett の *Waiting for Godot*, 1952 にも通じるものであり、フォースターの姿勢はウルフのモダニズムよりも徹底したものであったとも言える。

岩崎氏の分析は、フォースターが *A Passage to India* 以降小説を書かなくなった「謎」にも一定の答えを示すものであり、今後のフォースター研究に寄与するところ大である。審査の過程で、モダニズムをいわゆる「印象のシャワー」で表すことだけに簡略化して捉えているきらいがあること、Traditionalism と Modernism という言葉のもつ「-ism」のニュアンスが本人の思想／姿勢という別の方向をも示唆してしまうこと、Jameson の言う帝国主義の向かう「無限」と *Howards End* の目指す「無限」との差異が追求されていないことなど、いくつか引かかる点が指摘されたが、それらはいずれも今後の課題として発展させればよいことで、本論文の重要性を損なうものではない。以上、厳正に審査した結果、本論文は研究の独自性の点からも重要性の点からも、博士学位の授与にふさわしい論文であると認定された。

公開審査会開催日	2013年 1 月 23 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小田島 恒志	20世紀イギリス小説	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大島 一彦	イギリス小説	
審査委員	早稲田大学国際学術院・教授	ロー グレアム	English Language / English Literature	D.Phil. (Doctor Philosophae)
審査委員	法政大学文学部・教授	丹治 愛	イギリス小説/モダニズム文学	
審査委員				